



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第25主日 A年(2023年9月24日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 55章6—9節

第二朗読：フィリピの信徒への手紙 1章20c—24、27a節

福音朗読：マタイによる福音書 20章1—16節

神の気前のよさ

三つの朗読から

第一朗読ではまったく異なる神の思いと人の思い、神の道と人の道が示されます。異教の王すらをも使って捕囚から解放しようとする神の思いを人間が理解するのは難しいです。ですから、神の思いを受け取るためには、神のことばに「立ち帰る」必要があります。人間の「たくらみ」が「計画」へと変わるためには、神の「思い」を知り、それに合わせる必要があるのです。

第二朗読で、パウロは主イエス・キリストと共にいたいという「思い」と宣教のために働かなければならないという「思い」の間でゆれ動いています。そして、自分の使命を優先させていきました。

福音朗読にある「何もしないで立っている」に注目してください。「関わり」が切れてしまった人の悲しみを表しています。ぶどう園の主人は「関わり」を再び結び結ばそうとします。「友」も彼の同じ思いから生じる言葉です。

説教：神の気前のよさ

福音朗読の最後の方、15節にある「わたしの気前のよさをねたむのか」を直訳すれば「わたし(の目)が良いなので、あなたの目は悪いのか」となります。ギリシア語で「目が悪い」は機能的に目の働きが悪く、よく見えないこと(例:マタ6章22—23節)を指します。さらに、「よい目」は「寛大で広い心」を(例:シラ35章12節「あふれる心」)、「悪い目」は「ねじまがった、妬みの心」を意味します(例:マコ7章21節)。ここでは「目が濁っていて、目が機能しない」

の意味で理解できるでしょう。

報酬は労働に対する対価です。しかし、神さまは人間の生き方、働きに応じて報酬を与える方ではありません。めぐみを一方的に与えていくのです。イエスさまの時代、パレスチナ地方はローマ帝国の支配の下で多くの都市が成立し、貨幣経済が発達しました。都市に人々は働く場を求めて移動してきました。労働の時間と量に応じて報酬が払われていくという社会の常識、すなわち「人間のくわだて」に対して、イエスさまは報酬では把握しきれない別の価値観があることを示そうとしているのではないのでしょうか。『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』(6節)は働かない人への叱責のようにも聞こえてきますが、むしろ、大切なものを失いかけている雇ってもらえなかった人への「めぐみ」のこぼれのようにも響きます。

先々週の福音は「関わり合いで兄弟となる」がテーマでした。先週の福音は「ゆるしによって関わり合いを生きていく」がテーマでした。今日の福音も「関わり合い」というモチーフが響いているようです。「だれも雇ってくれないのです」(6節)は、他人との関わりが途切れそうになっている人間のもの悲しい訴えのようです。

第一朗読の最後の方に「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり」(イザ 55 章 8 節)とあります。ヘブライ語の原文はマハシャーヴァーだそうです。7節の「たくらみ」と同じ単語です。これは動詞「思う」(ハーシャヴ)から派生した名詞です。「思い」とか「計らい」が第一の意味だそうですが、そこから「たくらみ」、「計画」という意味が生まれていきました。福音朗読で、主人は「あなたと同じように支払ってやりたいのだ」(マタ 20 章 14 節)といひます。「やりたい」はギリシア語でセローです。その名詞形のセレーマは第一朗読に登場したマハシャーヴァー(思い)の訳語として使われている単語です。つまり、主人は「最後の者にも同じように与えたい」という「思い」をもっていたのでしょう。

それはとりもなおさず、人間との関わり合いを断ち切りたくないという父なる神さまの「思い」でもあるのです。

おしらせ

10月29日は、「ロザリオ祭」として、ミサの時間は7時と10時半だけです。

アントニオ会館の庭でミサをささげて、軽食を楽しみましょう。